

二 日清戦争経過概要

(一) 戦争の起因

日清兩國タシク對韓意見ヲ異ニシ彼之ヲ屬邦現ハ我之ヲ獨立
 視シ竟ニ此衝突ヲ生セシモ實ハ日本ノ國力大ニ充實シ海外ニ其勢
 力ヲ伸張シ得ルニ至レルト清國ノ積弱ニ拘ラヌ高キ韓國ヲ自モノ
 勢力圍内ニ置カントスル意ヲ有トシ衝突セルモノナリ

開戦の起因
 朝鮮國南部ニ東洋黨蜂起シ韓廷自ラ之ヲ鎮撫スル
 能ハサルヨリ始メテ當時清國ハ兵ヲ牙山ニ出シ之ヲ討伐セントシ
 我國モ年清物浦條約ヲ推利ニ依リ兵ヲ京城ニ出シタリ然レテ清
 國ハ我出兵ヲ咎メ我ハ條約ヲ推利ヲ主張シ且ツ韓廷ヲ保護シ
 テ將來ノ禍ヲ除クル原因ヲ一掃セシカ為メ施政改善ニ勉メ清
 國ト協同事ヲ締結シテ提議シタルモ彼ハ聽カス此向餘城ヲ韓
 兵ト我兵ト端ナク衝突シ我兵ハ韓兵ヲ驅逐シ王宮城ヲ守護スル

△ 宣戰ノ途
因ニ考メテ

予ト爲レリ斯クテ清國ニ其政略上ノ政勢ニ不利ナルヲ懐リ日本兵ニ對
 セル爲メ更ニ増援兵ヲ高陞号ニ送リ軍艦之ヲ發備シテ韓海
 ニ達スルヤ七月二十五日豐島沖ニ於テ我軍艦ト遭遇シ茲ニ砲火ヲ交ヘ
 清國軍艦ニ或ハ降リ或ハ沈没シ高陞号ハ被撃後余ニ在リサレ因
 リ擧沈セラレタリ此種被撃ノ事京城ニ在ル我混成旅團ハ清兵平壤ニ集マ
 ル報ヲ得後先ヲ制シテ牙山、清軍攻撃、途ニ上リ七月二十九日成
 敵ノ一戦ニテ之ヲ撃破セリ是レ九月日清兩國間ニ戦争起リ八月
 一月ヲ以テ各々宣戰ヲ布告スルニ至シリ 公送
 故ニ此戦争ハ日露戦争ノ如キ密然タル外交談判ノ破裂ヨリ生シタ
 ルモノ非スシテ互ニ相及目セル兩國カ積ニ觸レ暴力ヲ以テ相衝突シ
 タルヨリ起レルモノナリ是レ恰モ千八百七十年荷佛兩國カ鎖鑰ナル口実
 ノ許ニ宣戰シタルニ類スセリ
 當時東亞ニ對スル列國ノ關係ハ今日ノ如ク密接ナラス唯モ英露兩國

三

國ハ最モ利害關係ヲ有セシメ故ニ我ニ對シテ出兵スルニ方リ居中
 調停ニ盡力セシメ其後日清兩國ノ為スニ任カセ戰爭終んじ迄ニ敢
 テ干渉セス露國ハ東亞經管中ナルニ因リ唯此事件ノ早ク勃發
 シタルニ驚キ境上ニ兵力ヲ集メ漢夫ノ利ヲ收ントシテ其後ヲ規ヒ英
 國ハ極力ヲシテ初メ清國ニ中頃ヨリ日本ニ好意ノ態度ヲ示シタル
 程ニ至リテ戰爭ノ進行ニ極力干渉スル者ナリキ
 然レ今日ノ如ク交通發達シ四隣比接シ經濟相錯綜ス
 ルヤ世界ノ一局ニ於ケル葛藤モ亦爾余ノ諸列國ノ利害關係
 ニ影響スルヲ昔日ニ比シ大ナルモノナリ是以テ列國間ノ關係
 良好ニ維持セラレサル時ニ交戦スルモ得失相償ニス日清戰
 争ハ東亞ノ兩國間ニ行ハレ他ニ關係ナキカ如キモ是頃ヨリ
 世界ノ大勢ハ既ニ此風潮ニ向ヒ露國ノ如キ一講和ノ際ニ獨佛
 兩國ト共ニ連合シテ干渉ヲ試ミタリ當時獨逸ノ露國ニ連合

シタルハ不思議ナリシモ 近年ニ至リ獨逸政策ヲ然ラシメタル事明
 白ト爲レリ(獨逸宰相ホーヘンロー)ノ公ノ日記發表ニ據ル(即チ獨逸
 ハ震國ヲシテ東亞經營ニ熱中セシメテ歐洲ノ無事ヲ庶幾
 シタルモノナリキ此ノ如キ世界ノ聯實ノ度ニ其後北清事變ヲ經
 テ日露戰爭ニ至リ益々^カ勢場^カ加セリ即チ戰爭ノ政略ノ關係
 益々^カ密通^カヲ^カ預^カフヘキナリ

(二) 日清兩國ノ兵力

清國陸軍ニ勇軍練軍ヲ主トシ八旗兵ト綠營ト用ヲ爲サス而
 シテ全國ノ練勇兩軍ニ歩兵八百六十二營、騎兵百九十二營、總員
 四十万ヲ算スルモ 實際歩兵一營ニ三百五十人、騎兵一營ニ二百五十
 人ニ過キサルカ故ニ總員三十五万人トス今仮リニ歩兵ノ兵力ヲ
 我編制ニ換算(二營ヲ一大隊ニ算ス)セハ四百三十大隊余即
 チ三十五六師團ニ相當ス之ヲ當時ノ日本全軍ノ七個師團ニ對

比セハ実ニ五倍ノ優勢ナリ然レ氏此大兵力ハ清國各者ニ散
 在シ交通不便ニシテ此地隔シ在ルカ故ニ到底急速ニ之ヲ一
 ニ集合シ得ヘカラス此外清國ニ臨時新募又ニ編成整ヘ兵
 ヲ多數使用シ本戦役ノ當時總員九十八万ノ多キヲ算セシモ
 皆之ヲ戦地ニ使用シタルニ非ス其实际戦地ニ使用セシモノ清國
 ニ二万ニ奉天有ルニ十七万直隸有ルニ十九万下リニ區キス此奉
 天直隸両省ニ在リシ者モ之ヲ一地ニ集合セン下ニ其编制然養
 法ノ不備ナル者ノ之ヲ能クスヘカラス故ニ清國ハ外観上多數ノ
 兵力ヲ有セシモ其戦地ニ用ヒ得ル數ハ概シ日本軍ヨリ劣レ
 レリ
 殊ニ清國兵ノ素質訓練編成指揮迄等モ亦日本兵ニ劣ル數
 等ニシテ其全体ヨリ生スル差ハ日本兵一ヲ以テ清兵三ニ敵シ得
 へキ程度ナリ此差ノ最モ多ク生スル原因ハ清國軍ニ流シハ地ニ

兵力ヲ集結シテ戰フナク彼ノ後路應接ナル名符ノ下ニ必ス數
段ノ取備ヲ取リ其全力ヲ發揚スルヲ能ハサル戰術已分取
ルニ在リ

此ノ如ク全体ニ考レル兵ヲ以テ其集ノ得ル兵數ニ限リ有リトスレハ
彼令外觀上大兵力アルモ局部毎ノ戰術ニ於テ常ニ日本軍ヨリ
擊退セラル、ハ理ノ踏易キモノナリ

如上ノ等差アル兵力ノ衝突ナレバ故ニ日本軍ニ於テ冒カセシ戰
術戰術上ノ追失モ清軍ノ素質ニ其
層大ニ追失ト相較シテ遂ニ

懲罰ヲ受ケスレテ終リシト少ナカラズ是レ亦戰史ヲ研究スル
ニ方リ言ハレ外面ノ成果ノ見テ判斷スルコトナク深ク其事情
ヲ研究セサルハカラスン所以ナリ

然レモ兵力素質ノ差アルハ故ニ戰術戰術ノ研究ヲ為ス能ハズト申
斷定スルハ非ナリ唯此研究ハ困難ナル作業ニシテ充分ナル眼識

ヲ以テ解^決スルニ非ラスニハ往々不^正ナル結論ニ達スルノ恐アルヲ深ク銘記スヘキモノニシテ戦争ノ諸事蹟^ニ研究^ノキ價値アルモノトス

海軍ニ関シテハ日清兩國ノ勢力相匹^{セリ即チ}清國ノ軍艦八十二隻又水雷艦二十五隻總噸數八万五千噸^{ヲ有ス}日本ノ軍艦二十八隻又總噸數五万七千余噸^{ヲ有ス}訓練ニ於テハ日本軍ヲ勝サレリトシ軍艦ニ於テハ清國ニ定遠、鎮遠、甲鉄、威遠、四隻アル故ニ之ヲ勝サレトス唯我軍艦ニ速力ニ於テ清國ニ勝サレリ故ニ全体ノ勢力^{自仲ノ向ニ在リト謂フ}ハ是レ日清兩國^{間ニ在リ}海^上上^ニ攬^ヲ得^ル精^神決^意著^シセサリシ主因ナリ

(三) 日清兩國ノ作戰計畫

夫レ作戰計畫ハ敵ト第一、衝突ニ至ル迄ノ方針處置ヲ定メタルモノニシテ其以後ノ事ハ一、衝突、結果何如ニ甘^クツカサレハカラズ

毛ノト大因^ハ全休ノ戦争ニ對スル希望方針^ハ者ノ胸中
 ニ藏^ルモ止^ム之ヲ計畫^ストシテ細事^トニ豫定^スル^ハ多クハ情^況ノ变化
 ニ依リ徒勞^ニ屬スルモノナリ
 是故ニ海ヲ以テ相離隔スル兩國ノ戦争ハ先^ニ陸海軍ニ依リ
 海上權ヲ得ル^{コト}ヲ勉メサル^ハカラス其衝突ニ至ル迄ノ陸海兩軍ニ對
 スル区處^ハ即チ第一ノ作戰計畫トシテ現^ハル^ハモトク此戦争
 ニ於ケル日本軍ノ作戰計畫ハ此意味ニ依リ^テ制定セラル^ル大體二
 期ニ分ケ立案セラレタリ其第一期ハ海戰ノ結果何如ニ拘^ハラス
 實施ス^ル中事項即チ第五師團ヲ韓國ニ派遣スル^{コト}陸海軍ノ
 要地守備ト出征準備及艦隊ノ前進ヲ規定シ第二期即チ
 海戰ノ結果ヲ待^テ行フ^ハキモノヲ甲乙丙ノ三個ノ場合ニ分ケ甲即チ
 制海權ヲ得タル時ハ直隸河^口ニ陸兵ヲ返メ大決戰ヲ交ヘントシ
 乙即チ海戰ノ結果渤海灣ヲ制スル能^ハサルモ敵ヲシテ我近海ヲ制ス

二

六

此能ハサラハル時ハ陸軍ヲ韓国ニ遣メ此ヲ防備シ丙即ケ全ク制海
 權ヲ失フ時ハ内國ニ於テ防備スルヲ計畫セリ故ニ此第二期
 ノ計畫ハ數多ク場合ニ對スル大方針ニシテ嚴密ニ実行シ得ヘキ
 計畫ト云フヲ得ス其解釋ノ作戰計畫トシテ見ルヘキモノハ第一
 一期ノモノノミナリ之ヲ実施ニ徹スルニ果シテ第二期ノ作戰計
 畫ニ変更更ヲ加スノ已ヲ得サルニ至レリ即ケ兩國海軍勢力相
 等ニキ結果制海權久シク何ノモノトモ決定セス因テ先ツ乙ノ場
 合ニ於ケル如ク韓國ニ軍ヲ進ムルニ決シ次テ九月十七日黃海ニ戰
 ニ依リ清國艦隊ヲ擊破セシト雖モ其殘艦尚キ旅順港及威
 海衛ニ據リ渤海湾口ヲ扼シ茲ニ甲ノ場合ニモ至ラス又乙ノ場合
 トモ至ラス其中間ノ程度ニ在ル場合ヲ生シ加之既ニ秋至ニ達シ
 冬季ニ至ル期モ迄フキ年内ニ直隸決戦ヲ行フ見込ナキニ至レリ
 是ニ於テ更ニ冬期作戰方針ナルモノヲ調製セラシメ來春行ハントス

直隸作戰ノ為メ相地トシテ旅順半島ヲ攻略シ且ソ牽制ノ為メ
 奉天者ニ作戰スヘキヲ企図シ時トシテ甚至濟台領ヲ行フア
 ンヘキヲ規畫セリ之ニ拘ラス實際冬季向ニ於テ威海衛ニ在ル
 敵殘艦ヲ滅滅シ渤海湾口ヲ開放セカ為メ山東者ニ作戰
 ヲ行フニ至レリ（スルハ要ヲ生シ）
 是ヲ以テ觀ルモ敵ト第一ノ衝突迄ハ爾後ノ事ヲ正確ニ計畫ス
 ル能ハサルモノナルヲ知ルヘシ
 清國ニ作戰計畫ト稱スモモノナシ唯ハ南戦ニ決スル頃ノ當今者
 計畫ハ海軍ヲシテ渤海湾口ヲ扼セシメ併セテ陸軍ノ海軍物送ヲ
 支衛シ在韓ノ陸軍ト策應トセシメ陸軍ヲ平壤ニ集中シ日本
 兵ヲ韓國ヨリ驅逐セントスルニ在リ（詳細ハ附録
 第一卷參照）
 且シ甚ク謀略ニ計畫ニシテ第一海軍ノ使用法ヲ誤マレリ即チ
 制海權ノ獲得ニ勉メスシテ單ニ防衛的任務ニ服サシメ且ツ

陸兵輸送ノ護衛及陸軍ノ策應等ノ枝葉任務ニ膺ラシメタリ
 此ノ如キ根本ノ用法ヲ誤レル計畫ニ勢力敵ニ匹儔スル海軍ヲシテ
 遂ニ敗戦ノ已ラ得サルニ至ラシメタリト謂フヘシ何トナレハ其目的既
 ニ防守ニ偏セシカ故ニ志氣上ニ不利ナリシハ勿論其枝葉ノ任務ニ
 服スルニ方リ敵艦隊ト遭遇セハ其戦術準備ニ於テ敵ニ一儔ヲ
 輸スルニ至ルヘキハ免ルヘカラサル事ナレハナリ即チ九月十七日ノ黃
 海ノ戦ニ彼陸兵輸送掩護ノ任ニ服シ在ル持起レルモノニシテ
 陸軍ヲ近ク後方ニ引ヘ戦ハサルヲ得ス竟ニ敗北スルニ至レリ若シ
 日清兩國艦隊ノ位置ト任務ヲ換テ此海戦起ルトセハ其勝敗
 ノ決未タ知ルヘカラサルナラン
 又陸上作戰ニ関シテモ制海權ヲ得サルニ先チ陸軍兵ヲ平壤ニ
 集中セシメタルハ適當ノ處置ト謂フヲ得ス何トナレハ兩地ト安東縣
 間ノ後方連絡線ハ海面ヨリ脅威セラルルニシテ道路不良ニ

コレテ物資ノ運搬ニ便ナラスカフルニ元山方面ノ海面ニ日本ノ制スル
 所ナルカ故ニ同地ヨリ側面ヲ脅威セズンノ恐アリ故ニ大兵ヲ平壤ニ
 集中セントスルニハ是非海路輸送ノ補助ヲ要シ後ヲ西海面ヲ
 制スルノ必要アリシテ然ルニ實際制海權未タ確有セサルニ先ケ
 兵力ヲ平壤ニ集中シタルニ因リ給養ノ關係上大兵ヲ集メ得サリ
 シ、ミナラス後方連絡線ノ掩蔽ノ爲メ多ク兵力ヲ割カサルヲ得サ
 ルニ至レリ^{之ヲ}畏^ル恐^クハ實際行ヒタルカ如ク一万二千位ノ兵力ヨリ多クテ
 集中スル能ハサリシ^テ所以^ニ殊^ニ況^ニテ^ハ清國軍ノ如キ兵站組織ノ
 不完全ナル軍ニ在^リテ^ハ於^テオヤ^ハ此以上ノ兵力集中^ニ未^タ能^クセ^ザラレ
 故ニ清國軍ニシテ志氣ノ關係上初戦ノ成功ヲ重シシ戦場上ノ要求
 三浦^ニ合^シセ^シタル^トセ^ハ其^ニ集中^地ヲ鴨綠江畔ニ據定^シ海戰勝
 タ^ニ始^テ朝鮮^軍中^ニ前進^シ然^ラカ^レ此^ニ防禦^スル^ノ策^ヲ取^ルヲ以^テ這
 岸^トス^ルヘシ元來平壤集中ハ牙山ニ在^ル清兵ト相應^シテ京

城ニ在ル日本軍ヲ夾撃セントノ企圖ニ依リ実施セラレタルノ觀
 アリ果シテ然ラニ或敵ノ敗戦ニ此關係ヲ失ヒシニ因リ平壤ノ集
 中地ヲ後退スルノ中要アリシナリ又若シ政略上 韓廷ニ對スル威
 カヲ示ス為メ京城ニ近ク清國軍ヲ置クト、理由ナラニ戦略上ノ要
 求ト政略上ノモノト又對スル場合ニシテ先ク戦略上ニ重キヲ置カ
 ンキ時期ニ在ルモノト謂ハサルヘカラス高木平壤ニ集中シタル一隊全
 アリ即チ海軍カ此無理ナル集中地ノ為メ絶エヌ枝葉任務ニ使
 用セラルニ至リシコト是レナリ即チ増援兵輸送ノ後衛ヲ如キ是レナリ
 制海權ノ獲得ニ惠心一意從事スルキ時ニ方ク此ハ枝葉任務
 ナラ課ヤサルヲ得ヤルニ至リシコト極力ヲ不得策ナリトハシカカシ
 後々黃海々戰平壤戰同共ニ清國軍ノ敗北ニ歸スルヤ戦略上ノ敗
 勢益々不利ト為リ之ニ應スル作戰計畫モ亦紊亂セリ即チ
 先ク國境ヲ防衛セントシ又奉天ト北京ノ兩地ヲ等シク掩護セシ

コトヲ勉メ旅順口モ威海衛モ守備セサルヘカラス各所ニ守ルヘキ地多クシテ一モ守リ得タルモノナキ状況ト成レリ是レ實ニ地理上ノ價值ニ重キヲ置キ軍ノ着力ニ重ヲ置カサルノ致ス所ナリ

(四) 作戰經過ノ大要

日清兩國通ノ開戦ニ先ケ豊島沖ニ海戦起リ成歎ニ陸戦アリタル事ニ既述ノ如ク此等戦場ニ開戦ノ準備ト為リ爾後九月十五日平壤ニ日本第五師團ト第三師團ノ一部ヨリ攻撃セラシ十六日遂ニ陥落シ同月十七日黃海ニ戦アリテ又清國艦隊ノ敗退セリ是ヨリ先キ日本ニ第五師團ニ第三師團ヲ加ヘ第一軍ト為シ之ヲシテ韓國ヨリ敵ヲ撃攘スルニ任セシメ此兩戦場自軍司令官ハ第三師團ノ一部ト共ニ既ニ仁川ニ上陸シ在リ爾後第一軍ニ給養自難ヲ排シテ逐次前進シ十月二十五日遂ニ鴨綠江畔ニ據ル清國軍ヲ撃破シテ清國領土ニ進入シ續テ鳳凰城大孤山ヲ占領シ尙ホ微弱ナル敵ヲ

驅逐シテ岫巖ヲモ台領シ遼河大洋河水域一帯ノ地方ニ駐留セリ
 黄海ニ戦シテ海軍日本軍ノ有ニ帰スルヤ大本營ニ冬期作戰方
 針ニ據リ第一師團ヲ編成シテ旅順半島ヲ攻略セシムル此軍一十團
 二十五日岫巖ノ掩護下ニ花園口ニ上陸シ南東西進シテ金州及
 大連湾迄ニ其臺附出テ敵ヲ驅逐シ此ヲ根據地ニ根柢地ヲ此ニ設
 備シ更ニ西進シテ十一月二十日遂ニ旅順要塞ヲ攻陥シ其任務ヲ
 完結セリ

此間第一軍ニ冬季間徒ラニ敵ト對峙シテ駐留セハ我兵元ヲ損
 スヘキニナラズ我軍ノ前面ニ清兵大群シ来リテ他日直隸平野ニ
 進ムノ妨害ヲ爲シ至ルヘキヲ恐レ寧リニ我ヨリ先ニシテ遼東ニ在ル
 清國軍ヲ撃破スルノ必要ナルヲ感シ其第一師團ヲ以テ海城ニ進出シ十二
 月十三日此ヲ台領セリ且ニ於テ清國軍ハ三面ヨリ海城ヲ包圍シ蓋平
 ヲリ牛莊ヲ經テ鞍山迄ニ亘リ兵力ヲ集合シ第一師團ノ形勢頗ル

危陵ト為レリ是ニ於テ第二軍ニ請求スル其一部ヲ蓋平方向ニ
 進出セシメナイヲ以テセリ此結果混成第一旅團ハ金州ヨリ北進
 一月十日蓋平ハ清軍ヲ攻撃シテ此ヲ台領シ第三師團左側ノ
 危陵ヲ排除セリ是ヨリ先キ清國提督宋慶ハ蓋平ヨリ若
 干部隊率テ牛莊ニ到ラントシ近ク海城西方ノ地ヲ通過スルヤ
 第三師團ノ出撃ニ遇ヒ十二月十九日缸瓦寨ニ戦ハレテ清國
 敗退シテ官口方向ニ逃走セリ爾後第三師團ハ海城ヲ固守シ
 清國軍ハ前後四回三面ヨリ此ヲ包圍攻撃セシモ毎ニ撃退
 セラレタリ此冬季向鳳凰城方面ノ守備ニ任シタル第五師團ノ
 方面ニハ小戦(多クハ偵察戦)屢々起レリ其内極大ナルモノハ
 清國軍ノ南下シタルヨリ起ル鳳凰城ノ防戦(十二月十四日)及
 樊家臺ノ遭遇戦(十二月十日)是レナリ
 大木宮ハ他日直隸平定決戦ノ為メ渤海湾頭ニ兵ヲ進ムルニ

方リ威海衛ニ敵ノ殘艦アルハ、膠州口通過ノ妨害タルヲ感シ且ツ冬
 季間兵力ヲ空シク駐止セシムル時ハ、外國ノ干涉ヲ招クノ恐アリトシ
 第一軍ニ第一師團ヲ加ヘ、第二軍ニ第一師團ヲ加ヘ、協力シテ威海衛ヲ攻取セシムルヲ
 第二軍ハ第一師團ヲ派シ、第一師團ハ第一師團ニ殘シ、(内混成)旅團ニ蓋平ニ派遣
 他ノ一師團半(第二師團トテ六師團ノ一半)ヲ以テ山東半島ノ東南
 半島(龍口)陸ニ二月二日遂ニ威海衛諸砲臺ヲ攻取シ、後々
 海軍ト協同シテ港域ニ在ル北洋水師ヲ殲滅シ、二月下旬再旅
 順半島ニ復歸セリ
 此間第一軍司令官ハ第一軍三師團前面ニ清兵ノ蟻集セルヲ以テ直
 隸平定ニ轉進シ、膠州口離隔ヲ困難ナラシムルモノト爲シ、先ツ遼河
 平原ヲ掃蕩シ、以テ他日ノ拘束ヲ除クニ決心シ、第一軍五師團ノ一半
 ヲ依然鳳凰城附近ニ殘シ、其一半ト第三師團ヲ以テ先ツ鞍山並
 方面ノ敵ヲ擊退スルノ部署ヲ爲シ、第二軍ニ請求シ、第一師團ノ

全部ヲ管口方面ニ進ノ軍ニ有力ト其ニ遼河ハ附近ノ敵ヲ掃蕩ス
 ル事ヲ企テタリ之ニ依リオ五所田ノ半部ニ二月十九日ヨリ進動ヲ起
 シ鳳凰城ヨリ黃花甸ヲ經テ鞍山附近ニ進出シ第三所田ハ
 二月二十八日海城ヨリ本撃シテ敵ヲ北方ニ壓シ微弱ナル抵抗ヲ受ケ
 タル後鞍山附近ニ到リ茲ニ軍ヲ集令ニ待ニ俄然轉進シテ牛
 莊城ニ向ヒ東北西ニ面ヨリ包圍攻撃シ三月四日市街戦ノ後之ヲ
 攻略シ続テ管口方面ニ前進セリ此間第一所田モ亦二月二十四日
 大平山ニ據ル敵ヲ攻撃シテ之ヲ破リ管口ニ向ヒ前進シ三月六日
 殆ント抵抗ヲ受クルナク此ヲ台鎮セリ是時清國軍ニ有力ト
 庄臺ニ據ル乃チ第一軍ハ第一所田ト共ニ三月九日ヲ以テ田莊
 臺ヲ包圍攻撃シ敵軍ヲ潰敗セシメタリ此戦中三所田ト共ニ有力
 ニ所田半ニシテ日清戦争中ノ最大戦術タリ此ノ如ク遼河平原ノ
 掃蕩ヲ畢リ第五所田ハ直隸決戦中遼東半島ノ守備ニ任セリ

十一

15

1741

其他に直隸に到らしナクノ棄不地大連湾に引て移轉中休戦
 條約成立の作戦ヲ停止セリ海防司令官松村三郎
 大本營に新外道に近衛及第四師團ヲ第二軍に増加シ此西師團ヲ亦
 一、山海關附近に上陸セシメカ為メ其輸送船ヲ大連湾に集
 合セシメ在ル降休戦條約成立セリ是時直隸休戦ノ統一指揮
 一、為メに孤清大總督府ヲ編成シ又遼東守備ノ為メ台領地
 總督ヲ置キタリ
 次ラ諸州條約締結セラレ第四師團ハ台領地總督ノ指揮
 一、屬シテ遼東守備ニ任セられ近衛師團ハ其至海島守備ノ為メ
 其至海總督ノ指揮下に置キタリ而シテ爾餘ノ諸隊ハ逐次大連
 湾ヲ棄ルルニシテ凱旋セリ
 其至海守備ニ任セラレ近衛師團(半師欠)ハ總督ト共ニ同島ニ赴
 キ其至海東方三貂角に上陸スルヲ意外ニモ同島ノ官民連合

して抵抗ヲ試ミ茲ニ兵力ヲ以テ之ヲ征討セザルヲ得サルニ至リ
 而シテ基隆甚北新竹ヲ右領スルヤ賊徒抵抗激シキニ因リ近衛
 所用ノ銃砲モ此ニ拒改シ南進シテ彰化附近ヲ右領セリ此處賊
 徒ヲ猖獗ナルニ依リ更ニ民或茅四孤田ヲ加ヘ次ニ茅二所用意皆ヲ
 加ヘテ南進軍ヲ籌成^{近衛所用}彰化^{南進}他^{布袋口}及^{板寮}上陸
 ニ甚^上南^北包圍^北シ十月下旬此ヲ右領シ^{全島}賊徒ヲ戡定シ鐸^リ

三 日清戦史研究上特ニ注意スル事件

日清戦争當時使用セシ兵器及資材ハ今日ノモノト異ナレリ即チ
 大砲小銃ノ精銳ノ度ハ勿論艦船銃砲等ノ交通機關モ亦進歩
 ノ度ヲ異ニセリ故ニ戦場^{戦場}裡ニ於ケル兵器ノ交感ヨリズン地形ノ利用
 隊形ノ精^精異ナレハ勿論作戦上ニ於ケル輸送上陸働^働等ニ至ル迄
 多少ノ差異アルヲ免カス